

わたしたちができる国際平和

～カンボジアを通してアンテナをひろげよう～

宮島 利枝子

横浜市立能見台南小学校

実践教科：国語・総合

時間数：26時間

対象学年：小学5年生

対象人数：37名

カリキュラム

<実践の目的>

- ・「国際平和」という言葉を難しくとらえるのではなく、身近な内容として理解し、実践していこうという意欲を持つことができるようにする。
- ・同じアジアの国であるカンボジアに興味・関心をもち、カンボジアの伝統・文化に敬意をもてると共に、神奈川県にカンボジア人が多く住んでいることを知り、地域の一員としてその事実に向き合っていったらよいかを考えることができるようにする。

授業の構成

| 時限 | テーマ・ねらい | 方法・内容 | 使用教材 |
|--------|--|--|--|
| 1～4 | 「横浜市スピーチコンテスト『わたしたちができる国際平和』」 ねらい：「国際平和」について身近に考え実践に向けて意欲を持つことができる。 | (1) 「国際平和」という言葉からどんなことを想起するか、クラスで意見を出し合う。 (2) 自分が大切だと考える、またはしたいと思う「国際平和」活動について作文を書く。 (3) クラス内で発表し、感想や意見を交換しあう。さらにクラス代表が5・6年全体に発表する。 (4) クラス代表として選ばれた「アンテナを広げよう」をテーマに1年間の総合学習を考えていく。 | (1) 4年までの既習事項の振り返り ・水はどこから ・平和学習 ・バリアフリー (2) 児童会活動の振り返り ・福祉委員会 ・ユニセフ募金 |
| 5 | 「もし世界が百人の村だったら」 ねらい：富の分配 | (1) ワークショップを通して、世界中の貧富の格差について、問題意識をもつ。 | (1) 世界がもし100人の村だったら |
| 6 7 | 「カンボジアってどんな国だろう」 ねらい：カンボジアという国についての興味・関心をもつ。 | (1) カンボジアはどこだろう。 (2) カンボジア研修での撮影ビデオを視聴し興味をもつ。 (3) カンボジア研修に同行したTVKのビデオを見て、カンボジアへの理解を広げる。 (4) TVKニュースを通じて、神奈川県に住むカンボジア人が多いことを知る。 | (1) 世界地図 (2) カンボジアで撮影した写真・ビデオ (3) テレビ神奈川のニュース番組 |

| | | | |
|---------|---|---|---|
| 8 | <p>「神奈川県に住む外国籍の人たちのことを知ろう」</p> <p>ねらい： ・ 外国籍の子どもたちのもつ課題について知り、共感できる。 ・ カンボジアについて調べようという意欲を持つ。</p> | <p>(1) 横浜市立いちょう小学校を題材にした NHK のドキュメンタリー番組を見て考えをもつ。 (2) 自分たちの現状と比較して、感想を発表しあう。</p> | <p>(1) NHK ヒューマン ドキュメンタリー「大きないちょうの木の下で」 (2) 久郷ボンナレット著「虹色の空」</p> |
| 9 ~ 19 | <p>「カンボジアについて調べよう」</p> | <p>(1) カンボジアについて調べたいことを発表しあい、テーマを決める。 (2) テーマごとにグループに分かれ、取材や調べ学習を進める。 ・ 高床式家屋 ・ アンコールワットと歴史 ・ 踊りと遊び ・ 内戦と地雷や不発弾 ・ シャンティボランティア活動 ・ 横浜市とカンボジア</p> <p>各種資料・カンボジアの生徒への取材・カンボジア人に技を習いに行く等</p> | <p>(1) 図書資料 (2) インターネット資料 (3) 日本地雷処理を支援する会 (JMAS) 資料 (4) アンコールワット紹介ビデオ (5) シャンティ国際ボランティア会 (SVA) 資料と絵本</p> |
| 19 ~ 25 | <p>「調べたことを南小学習フェスティバルで発表しよう」</p> | <p>(1) 国語「ニュース番組作りの現場から」にしたがって、放送原稿を作成する。 (2) 時間を考えながら、原稿を校正していく。 (3) 発表の練習をする。 (4) 『GS(5年3組)ニューススタジオ~カンボジアを通して、国際平和を考えよう』をテーマに発表する。</p> | <p>(1) 光村 5 年国語上「インタビューをしよう」 (2) 光村 5 年国語下「ニュース番組作りの現場から」</p> |
| 26 | <p>「フェスティバルの振り返りと今後の課題」</p> | <p>(1) 発表の振り返りを作文に書く。 (2) 今後に向けて見通しを持つ。</p> | |

授業の詳細①

1時限：今までの学習を元に、「国際平和」という言葉から想起する内容を発表し合い、お互いの考えを参考にできるようにした。

子どもたちの発表

戦争と平和

- ・戦争は日本では起きていないが、今でも戦争が続いている国がある。
- ・いろいろなところでテロがおきている。
- ・不発弾が日本で発見されてニュースになった。
- ・地雷で怪我をしている人たちがたくさんいる。
- ・今では広島・長崎の原爆よりも怖い武器がたくさん作られている。
- ・友だちと仲良くしていくことが、戦争をなくすことにつながると思う。

環境問題

- ・地球温暖化が世界中の問題になっている。
- ・なるべく冷暖房を使わないようにしたい。
- ・車をたくさん使わずに、公共交通機関を使えるときは使うようにしたい。

食糧問題

- ・とうもろこしを燃料にしたことで、昨年食糧危機の問題が深刻になった。
- ・私たちは給食をはじめ食べ物を無駄にしていることがある。

ボランティア活動

- ・エコキャップを集めて注射にかえる活動をこれからも続けていきたい。
- ・ユニセフ募金の活動でお小遣いを寄付した。
- ・学校に行けない子どもたちが世界中にはたくさんいるから、募金活動で支援していきたい。

水について

- ・日本では水道が当たり前だが、遠くまで毎日水を汲みに行かなければならない地域もある。
- ・汲みに行った水がきれいとは限らない。
- ・日本は水道がない地域に井戸を掘る活動の支援をしている。

2時限：たくさん出た意見を参考に、自分の考えを広げたり深めたりして、スピーチコンテストに向けての作文を書き、発表しあってクラス代表を選ぶ。

子どもたちの作文より

エコキャップについて

ワクチンを作って病気の怖さからたくさんの人を守りたい。

(いろいろな国と仲良くする)

いろいろな国のマナーを知って、行ったときには守る。国によって差別しない。その国の言葉や文字を覚えたい。

(戦争)

いろいろな国の大統領たちが集まって話し合いで戦争をなくして欲しい。

(私が願う国際平和)

学校に行ける・ご飯がたくさん食べられる・薬で病気が治る
衣類のリサイクルやエコキャップ活動、おつりの募金を続けたい。

(役に立つ募金)

被災地への募金・ワクチンの購入・食糧援助

(まわりの人と仲よく)

平和を願うこと以外思いつかないが、まわりの人と仲よくしたい。

(世界平和のために私たちができること)

英語をはじめ、たくさんの言葉を勉強して、世界の人たちと話し合えるようにしたい。

(ぼくたちは恵まれている)

水が簡単に手に入らない地域があることを忘れないで、水を大切にしたい。

(国際平和 今自分にできること)

薬も買えない、食べ物がない、学校に行けない、そんな国を笑顔があふれるようにとユニセフをはじめた。

「こんな貧しい国に生まれたくなかった」と思うのは間違いだと思う。

「あなたには生きる意味がある」と手紙を書いて、みんなを励ましてあげたい。苦しんだり、悲しんでいる人の気持ちを考えながらずっと生きていこうと決めた。

(国際平和のために 私ができること～アンテナを広げよう)

日本や世界の喜びや悲しみについてアンテナを広げ、自分が今できることは実行していく。

成果と課題①

まず、エコキャップやユニセフなど、現在行っている活動への関心は大いに認めたい。

しかしそれらの支援が届く先の人たちとクラスの子も達は、直接のかかわりを持たない。その意味で言えば「自己満足」ととらえられないこともない。また、エコキャップもユニセフ募金も、衣類のリサイクルも、自分にとってさほど必要ないものを分け与えるという範疇を越えない。あえていえば、そのような支援には、「私たちは恵まれているから、恵まれない人たちに、何か分けてあげよう」という上から下への流れを感じさせるものがある。

もちろん子どもたちは純粋に「困っている人がいたら助けたい」と思っているだけなので、彼らの思いを育てつつ、もっと対等な関係の「国際平和」を子どもたちに感じさせることはできないかと考えた。

このとき手がかりとなったのは、先に太字で書いた何人かの考えである。これらに共通する思いは「**対等なコミュニケーションと相互理解**」ではないだろうか。世界中に絶えない悲惨な戦争の原因に相互理解・話し合いの欠如があることを子どもなりにとらえ、だからまず、「自分はまわりの人と仲よくしていきたい」と思うことは、まさに身近な「国際平和」であると感じた。また、「まわりの人」が「いろいろな国の人」に広がり、様々な言葉や文化を理解したいというのは、まさに「**多文化共生**」の考え方ではないだろうか。子どもたちは今までの学習を通じて、このことの大切さを直感的に感じ取っている。

そこで、そのことを念頭におきつつ、クラスで選ばれた「アンテナを広げよう」をテーマに、身近な国際平和活動を考えていくことにした。

授業の詳細②

5時限：「もし世界が百人の村だったら」

ワークショップの手順に従い、世界の男女比率や、年代比率などを学習した後、最後にペットボトルの水を富に従って分配する活動を行った。その時、貧困層、富裕層となった子どもたちの発言や様子は興味深かった。

貧：えー、たったこれだけ！？

(富裕層に) そんなにあるの、ずるい！

そんなにあるんだから、分けたっていいじゃん。

くれないなんて、いじわるだよ。

私の分だけもう少し入れて。
のどがかわいて、もう死にそうだ・・・。
大切に・・・大切に・・・。
あっ、こぼさないでよ。

富：これは、自分の分だから、あげない。
わーい、お金持ちだあ。(本当にうれしそう)
こんなにたくさんあるから、少しわけてもいいかな。
あんなに少ない人たちがいるなんて、かわいそう。
あっ、ちょっとこぼれちゃったよ。

成果と課題②

やはりすごいと思ったのは、子どもたちが演技ではなく、自分に与えられたコップの水を前にして本気になっている姿である。大人なら、「ああ、やはりこんなに貧富の差は大きい」という理性的な一言で処理するだろう。そこが子どもと大人の感性の違いであり、子どもがこういった体験的なワークショップをすることの意義を感じた。

しかし、この貧富の差を前にしたとき、「もし世界が・・・」という題名につられて、貧富の格差が国際関係でのみとらえられはしないかと不安があった。たとえば、日本社会の中にも、有り余るほどの財産をもつ富裕層と明日の生活にも課題を抱える層があることに注目して欲しかった。そういった討議の場を持つ予定であったが、結果として時間をとれず、言葉だけの説明で終わってしまった。それで、次時からのカンボジア授業実践では何らかの形でこの課題にふれる時間がほしいと思った。

授業の詳細③

6～8時限：カンボジア研修でのビデオ視聴：

カンボジアの音楽、アプサラダンス、アンコールワット、羽けり遊び紹介

テレビ神奈川での教師海外研修特集ビデオ視聴：

シャンティ国際ボランティア会の移動図書館、地雷・不発弾処理活動紹介

NHKのドキュメンタリー番組「大きないちょうの木の下で」：

横浜市立いちょう小学校に通うカンボジア籍の6年児童が、自分のアイデンティティを探りながら成長していく過程のドキュメンタリー番組。

成果と課題③

最初の2つのビデオでは、子どもたちは担任の姿を探すことにまず興味をもった。本題とは関係ないとはわかりながらも、そんな姿に期待するものがあった。本校の子どもたちにとっては「カンボジア」なんて、とても遠い、今まで恐らく脳裏にはほとんど存在しなかった国だが、いつも自分たちの目の前にいるこの担任がビデオの中にいることによって、少し身近になっていくのではないかということである。そして期待通り、子どもたちのカンボジアに対する感じ方には変化が見られた。私が身に付けているものに対して、「これ、カンボジアの服？」全く違々と聞いたり、「わたしの塾の先生ね、カンボジアに自転車を寄付しているんだって」など、カンボジアという言葉が口に上るようになった。

またビデオのアプサラダンスやアンコールワットでのアプサラの彫刻が出てきたときには、「これ、キーホルダーの？」お土産と興味深げに尋ねてきたり、CLC（コミュニティーニングセンター）のミサンガを毎日のように嬉しそうにつけてきてくれたりなど、カンボジアについて調べ学習を始める前に、紙に水が浸み込んでいくように、少しずつカンボジアという国名が

子どもたちの語録に加わって欲しいという願いはある程度達成できた。

また対等なコミュニケーションという点から、**カンボジアに対するプラスイメージ**をもてるように配慮した。例えばニュースで流されたスラム街の様子等についてはあえて説明を加えず、スラムはスラムでも、その地の移動図書館で働く職員のすばらしさや、子どもたちの目の輝きについて、自分の印象を感じたままにコメントした。また現代人を圧倒する世界遺産の迫力を伝えた。

2本目のテレビ神奈川のニュース番組「ニュースハーバー」の中で取り上げられていた、地雷・不発弾処理については、もともと半分以上の子どもたちが知識として知っていた事柄でもあり、「先生、地雷見たの?」「爆発させるとき、いたの?」と興味津々で尋ねてくる子どもたちに、その時の様子を語った。

3本目のいちょう小学校に通う児童たちのドキュメンタリー番組を通して、問題にさらに踏み込めることとなった。自分たちと同世代の子どもたちが、自分のアイデンティティに悩んでいる姿に対し、「ほとんど年がいったのに、あんなことを考えているなんてすごい」とか、「私は日本に暮らしていて日本人だということを考え直した」「日本人として、あの人も暮らしやすい国だといいい」等々、驚きと共に彼らの悩みに共感していく姿がみられた。

また、このビデオを送ってくださった平塚在住の久郷ボンナレットさんが、なぜ、日本にやってきたのかという話を紹介すると、先に視聴した地雷処理ビデオとも重なり、カンボジアでの内戦の事実とその悲劇について、何人かの子どもたちが調べたいと言ってきた。

授業の詳細④

9時限：話し合いの結果、大きく6個のテーマが決まり、それに従って6グループ+アナウンサーグループの計7グループに分かれて活動することに決まった。

10～23時限：グループ別調べ学習と原稿作成

1. アナウンサーグループ

まず、実態調査をすることになり、主に校内でカンボジアの知名度や知っていることについてインタビューとアンケート調査を行った。

結果としては高学年でも正確な国の位置を知っている人は少なく、国の印象としては貧しさ、水の不衛生さ、地雷などが多くあげられた。その他、日本の芸能人が学校を建てていることや世界遺産もあがった。この結果に鑑み、発表の順番を組み立てていく作業と原稿作りを始めた。

2. カンボジアの家屋グループ

カンボジアの農村で今でも典型的な高床式家屋について、その模型をつくり、さらになぜ高床式家屋がカンボジアで伝統的となっているのかを調べた。

まず図工が好きな児童が中心となり、自分たちがインターネットで調べた家屋の外観・内観の写真をもとに、段ボールを使って高床式家屋の模型づくりに取り組んだ。放課後も約束時間ぎりぎりまで制作していたり、屋根を取り外して内観を紹介できるような工夫をし、壊れやすい階段部分を自宅で仕上げ直前まで保管したりなど、家屋制作への愛情と熱意が感じられた。仕上げはグループのみんなで協力して割り箸の1本1本にまで丁寧に彩色していた。

またカンボジアの気候風土を調べ、日本とは比較にならないほどの降水量を雨期にもたらす熱帯モンスーン気候や、風通しなど、高床式家屋が環境に適していたことを理解していった。

メコン川についてはカンボジアの大地にもたらしてきた恵みを熱帯モンスーン気候が引き起こす氾濫に関連づけて調べた。川の氾濫については、理科で「流れる水の働き」で実験した事柄や、4

年の社会科「水はどこから」で学習した川の働き、護岸工事について日本とカンボジアの対処方法の違いを比較しながら調べた。どちらが進んでいるというものではなく、川の性格の違いや住民の考え方など、それぞれに優れた点や問題点があることを理解していった。以下、子ども達が仕上げた原稿の一部である。

A：はい、タイ・マレーシアなど、東南アジアの熱帯のうち、季節風に支配され、乾期と雨季がある地域のことです。年間降水量 1000～2500 ミリをもたらします。日本 1700 ミリと比べるととても多いんです。このように、高床式の家は、とてもカンボジアの気候に合った造りをしているのですね。

アナ1：なるほど、そして暑くてもクーラーをかける必要がないかもしれませんね。

アナ2：自然に逆らうのではなく、自然にあわせて私たちが生活していくのですね。

M：日本は山国で川も急なのです。そのためすぐに海に達しますが、カンボジアのメコン川はゆっくり流れているので、日本の川とはまるで違います。

K：氾濫を防ぐために堤防やダムを造ることが多いですが、護岸工事が被害をもたらすこともあります。

A：たとえば高知県の仁淀川でご説明しますと、・・・堤防によって今まで水に浸かっていた土地にも建物が建てられます。そのぶん水は一度にどっと川へおしよせ、川の洪水は増えたのです。

O：護岸工事やダムが決してすべてを解決する方法ではなかったのかもしれませんが。

アナ1：「自然とともに生きる」ことをもう一度見直す必要があるということですね。カンボジアからいろいろなことを教えていただきました。ありがとうございます。

3. アンコールワットグループ

図書資料をもとに世界遺産としてのアンコールワットの魅力について調べ、この巨大な建造物が建てられた頃の歴史について理解を深めた。

またフェスティバル当日の入り口の大きな看板制作を担当し、下絵に丁寧に色づけしクメール文字も意味が分からないながらもねして書き加えるなど、工夫して一生懸命取り組んでいた。

4. 踊り（伝統芸能）と羽けり（遊び）

伝統芸能の踊りについてインターネットで調べてきて、実際に踊ってみるというので、それならばやはり実際にカンボジアの方に教えてもらった方が良いと考え、平塚在住でカンボジアの子ども達に踊りを教えているというNさんに習いに行くことにした。

平塚市横内の町には日本語以外の文字が通りに見られ、「これ、どこの国の文字？」などと興味を持ちながら会いに行った。また「多国籍の町」としての横内を紹介することにし、「この看板がいいよ。」「あっちの方が・・・」などと楽しそうに決めていた。多国籍の町をすんなりと受け入れている子ども達の姿を感じた。

Nさんは大変親切に、熱心に踊りの基本を教えてください、また「なぜ、この地に住むカンボジアの子ども達に教えたいと思ったのか」という子ども達の質問にも丁寧に答えてくださった。「みんなより小さいくらいの頃に日本に来て、自分はカンボジア人なのに、カンボジアのことは知らない。・・・文字や言葉など、難しい事でなく、踊りのように楽しみながら、カンボジアの文化を覚えていって欲しい」

そんなインタビューの後、子ども達はNさんから1時間あまり、手足の動きといった舞踊の基礎を手ほどきしていただいた。学校に戻ってからは、伝統舞踊の種類について調べると共に、教えていただいた踊りをビデオを見ながらフェスティバル当日に向けて一生懸命練習していた。

一方、おみやげに買ってきた羽は特にサッカー好きの子どもに人気で、彼らは、この「サイ」という遊びを披露することを即断したようだった。続けるには技術もかなり必要で、熱心にあそんでいた。しかし、足先で蹴る以外にも技があることを知り、やはり平塚まで教えてもらいに行きたいということになり、放課後訪ねた。

「子ども達はみんなこの羽をもっているか」「上手な人とどのくらい続くのか」といった素朴な疑問にも答えていただき、実はカンボジアの多くの子ども達は羽を手作りしていること、中国から伝わった遊びだろうということ、通常4人で遊び、何回続くかではなく、何分落とさずに続くかを楽しみ、上手になると30分以上続けられることなど知り、また羽の投げ方や足以外でのかっこいい受け方などを教えていただき、学校に帰ってからはさらに意欲的に練習に取り組んでいた。

5. 内戦・地雷グループ

カンボジアになぜ、地雷が多く埋められているのかという疑問をきっかけに、カンボジアの内戦について調べる子どもと地雷の現状について調べる子ども達に分かれて活動した。

内戦については、ベトナム戦争との絡みや自由主義・社会主義といった小学生には少し難しい内容も多分に含まれていたため図書資料で調べても理解できない事が多く、教師が簡単に説明したことをまとめることになった。まとめた原稿を地図と照らして地理関係を確認していた。また、その内戦がもとでカンボジアから日本に避難してきたいわゆる難民のことを知り、さらに神奈川県が大和定住促進センターに難民を受け入れたことで、神奈川県にカンボジア人が多いことを理解した。

原稿の最終段階で子ども達が「先生、この言葉を加えたいんですけど・・・」と次のような一文を見せに来た。「しかも逃げている時に見つかる、殺されてしまうのです。」彼女はどうか久郷ボンナレットさんの書いた「虹色の空」を読んでどうしても言いたくなったらしい。

地雷について調べた子ども達は、現在の地雷と不発弾の状況を地図に色づけしたり、世界の地雷汚染の状況や、なぜカンボジアに地雷が多く埋められているのかについて調べたりした。さらに前出「虹色の空」を友達に回したり、教師が紹介した絵本「地雷ではなく花をください」を読み合ったりする姿が見られた。地雷除去を強く願う思いが感じ取れた。

6. シャンティ国際ボランティア会グループ 「絵本を届けよう」

シャンティ国際ボランティア会についてパンフレットやインターネット資料で団体について調べ学習をすると共に、実際に絵本を取り寄せ、活動に参加した。その活動を通じてもった感想を発表した。

N: カンボジアのシールを切った時、黒い線を残さないようにするのは難しかったのですが、みんなに笑顔で読んでもらえるようにがんばって作りました。
I: ていねいに作らなければいけないので、難しかったです。でも、世界の子どもたちに絵本を贈るという経験ができて、良かったです。

Nは冒頭に紹介した作文「『あなたには生きる意味がある』と手紙を書いて、みんなを励ましたい。・・・苦しんだり、悲しんでいる人の気持ちを考えながらずっと生きていこうと決めた」と書いた児童である。彼女にとっては、実際に苦労した文字シール貼りのボランティア作業を通して、世界の向こう側にいる子ども達の笑顔がより身近なものになったのではないだろうか。

またIは発表後の感想文の中で、「お菓子よりも絵本の方が好き」という贈られた先の子どもの声が強く印象に残ったことを書いている。そして子どもだったらみんな好きなお菓子よりも、もっと好きな絵本を届ける活動ができたことをとても嬉しく感じたらしい。彼女はこつこつと資料をまとめていた。

絵本にはクメール文字で名前を記入する欄があり、自分たちの名前を練習すると同時に、フェスティバルに来たお客さん達にも楽しそうに教えていた。

6. 横浜市とカンボジアグループ

横浜市にもカンボジア籍の子どもが住んでいることはビデオで知った子ども達だが、それだけでは、単なる知識にすぎない。本校の学区には外国籍の児童は少ないので、是非、実際に外国籍の子どもに会って欲しいと思った。世代としては5年の児童らにとってお兄さん、お姉さんの年齢が最適であると考えていたが、研修参加者に上飯田中の先生がいらっしやり、試験期間中という悪条件をおして機会を整えてくださったので、3人の児童を連れて放課後インタビューに出かけていった。

子ども達が前もって用意した質問は次のようなものである。

- ・ どうして日本に来ることになったのですか。
- ・ 横浜は住みやすい町ですか。
- ・ 日本に来て大変だったことは何ですか。
- ・ 僕たちに一番伝えたいと思うことは何ですか。

また、上飯田中の先生には

- ・ カンボジア籍の生徒は何人くらいいるのですか。
- ・ 何年くらい前からカンボジア籍の生徒がここで学んでいるのですか。
- ・ 外国籍の生徒がたくさんいる上飯田中のよいところはなんですか。
- ・ 僕たちに一番伝えたいことはなんですか。

中学3年生のMくんも、担任の先生もとても真摯にインタビューに答えてくださり、子ども達は感激もひとしおの様子だった。Mくんや担任の先生の返答に心から相づちをうつ姿が見られた。Mくんが大変好感のもてる青年であったこともあるが、子ども達は彼のファンになり、翌日は学校でMくんの話をおもげに友達に紹介していた。(家でも両親に話していたそうである。)再び原稿の一部を紹介したい。

S: 次に、神奈川県は住みやすいかときいたら、住みやすいといってくれました。

F: 日本にきて、みんなやさしいときいてうれしく思いました。

T: ぼくは日本人の中でも差別があるのに、上飯田中学校では、外国籍の人でも差別がないのはすばらしいと思いました。

かれらにとってカンボジアはもはや遠い国ではなく、すてきな「兄貴」の母国であり、また日本に住むカンボジア人も必要以上に日本人と区別すべき存在ではなくなっていた。

成果と課題④

子ども達にとって、カンボジアは確かに身近な国になった。この神奈川県に、横浜市にカンボジアが存在することを子ども達は肌で感じ、喜んでいる。またある保護者の方からこんな話をきいた。TVから「メコン川」という言葉が流れたとき、「えっ、おれ、知ってる」と、おもげに言ったというのである。家族のなかでは自分がカンボジアについて一番知っているという自負心ではないかとそのお母様も嬉しげに話してくれた。わたしは同時に、それはカンボジアへの愛情ではないかとも思う。

愛情が生まれたからこそ、カンボジアという国が通過した悲劇についても共感できるようになった。発表後の作文の中にこう書いた児童がいた。

「わたしは先生からカンボジアのお土産(アプサラのキーホルダー)をもらって、カンボジアは

豊かな文化のある国だと思いました。だから、カンボジアにとっても悲しい内戦があったことや学校に行けない子どもがいることを知ってびっくりしました。」

「私たちができる国際平和」について、対等なコミュニケーションを念頭に始めたが、対等ということは、互いへの敬意と愛情であるということ子ども達から改めて認識させられた。愛情があればこそ、ある意味自分も苦勞を覚えるボランティア活動に参加でき、自分自身の苦勞があればこそ、その成果を心から喜ぶことができる。カンボジア人の兄貴が好きだからこそ、カンボジアに興味を持つ。

しかし、この学習はこれではまだ終わりになっていない。日本における「外国人差別」について、子ども達は知ることになった。フェスティバル当日に発表を見に来てくれた大好きなMくんや、ベトナム籍のRくんが、高校できちんと学習を続けられるのかという問題をちらりと感じ、また、平塚のNさんの知人で、実際に現在の不況のなか、日本人ではないという理由で早々と解雇されてしまった方がいるという事実を知った。何か不条理を感じ始めた。アナウンサーグループの子どもが書いたGSニュースのまとめ部分の原稿である。

アナ1：いつまで日本に住んでも「日本人」として受け入れてもらえない「日本」の社会があるということですか。
アナ2：そうですね。
アナ1：なんだか、日本人としてさびしい気がします。外国人も日本人と同じように待遇してもらいたいと思いますが・・・。

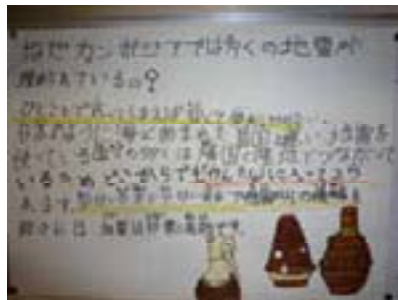
このテーマについて、1月以降、また調べていこうということになった。私たちができる国際平和として、今の日本の現状についてもアンテナをたてて行かなくてはいけないのだという子ども達の思いである。

また、シャンティボランティア活動についても、これからも続けたいという意見が出された。学活で話し合った結果、全員一致で活動を続けていくことになった。今後東京事務所を訪問する機会が得られればと願っている。

単発で行うのは割に簡単な事であるが、続けるのは気力と労力を要する。しかし、それでこそ「私たちにできる」国際平和の実践なのだという意識をもって、今後の活動に努力していきたい。そして、この学習は3月をもって終わるが、子ども達にみられた嬉しい変化が基層となって、今後の成長がその上に積み重ねられていくことを願っている。



子どもがカンボジア語の文字シールを貼った絵本



カンボジアでは地雷がなぜ多いのか



カンボジアの衣装を身にまとい、踊りも上達？



GS ニュースの放送中。保護者や地域の方々も多く見に来てくれました。



自分たちで作成した高床式住居について説明する児童たち

参考資料

文献

- ・ 「アンコールの遺跡 カンボジアの文化と芸術」今川幸雄 霞ヶ関出版
- ・ 「アジアの至宝 アンコール遺跡」 NDN BOOKS
- ・ 「HNANDICAP INTERNATINAL」（地雷についてのカンボジア語の絵本）
- ・ シャンティ国際ボランティア パンフレット
大地の図書館・CORPORATE PROFILE・絵本が読みたい
- ・ 「本当のカンボジア」 カンボジア情報誌 アドフューズコミュニケーションズ
- ・ 「What is Cambodian Mine Action Centre
地雷と不発弾がなくなるまで、私たちは戦い続けます。シーマック」 JICA
- ・ 「地雷ではなく花をください」 柳瀬房子 自由国民社
- ・ 「虹色の空」 久郷ボンナレット
- ・ 「カンボジア語実用会話集」 ラオ・キム・リアン 連合出版

ビデオ

- ・ テレビ神奈川ニュースハーバー 「教師海外研修特集」
- ・ NHK ヒューマン ドキュメンタリー「大きな いちょうの 木の下で」
- ・ HISTORY OF ANGKOR WAT
- ・ カンボジア研修で撮影したビデオ